備前岡山藩池田綱政の和歌修練①

―飛鳥井雅章添削の百首歌を中心に―

福留瑞美

はじめに

池田綱政（1638-1714）は、十六歳の承応二年（1653）十二月に元服し従四位下・侍従・伊予守となるが、それ以前から堂上歌人である飛鳥井雅章（まさあきら）（1611-1679）の歌鞠門弟となっている。

「蹴鞠免状之次第」（岡山大学池田家文庫 R5-95-5）によると承応二年三月五日～寛文七年八月廿三日にかけて蹴鞠免状を取得しており、和歌の方も寛文十年（1670）成立の「池田綱政七十七首」（林原美術館 書跡 284-19-2 外題「雅章卿合點庚戌季春孟秋両度七拾七首」）の跋文に「二十とせあまり合点を給りし歌数（うたかず）あまた侍れども」と記しており、池田綱政は飛鳥井雅章から蹴鞠と同時進行で和歌の指導も受けていたことがわかる。

そこで本稿では、飛鳥井雅章の和歌指導や池田綱政の和歌修練がどのようであったのか、林原美術館が所蔵する岡山藩池田家旧蔵・池田綱政自筆詠草類の中から池田綱政唯一の百首歌を中心として具体的に見ていこうと思う。

一、「池田綱政病中吟詠百首」の成り立ち

池田綱政百首（書跡 284-19-1 袋綴一冊 18.0 × 15.9cm）については、以前に拙稿「近世大名による和歌の学びと交流――岡山藩・池田綱政と広島藩・浅野綱晟（つなあきら）――」（関西大学国文学会『国文学』一〇三号・二〇一九年三月一日）において、池田綱政が同門の浅野綱晟の求めに応じて披露するため作成した百首歌である可能性が高いことを述べた。多少重なるところではあるが、当該百首の成立背景を整理しておきたい。

まず、百首の跋文（漢字を当てて振り仮名を（ふり）、濁点を加えている）に、

百首之内
合点七拾三首　内褒美二十四首　外可勝可聞十三首

此百首は、庚戌の夏卯月の初めつ方よりいたわること侍し心地の年、うち臥しがちにのみ暮らし侍るに、この度は例にかはりて身じろきも心に任せず、身柄かくてはえ堪うまじき程に悩み侍ける。されども些か弛びぬる暇、あぢきなき心の筋を里びたる言の葉に述べ、はかなき筆のすさみに書き連ねし内を十づつ十の数に撰り出でて、散位まさあきら卿のもとへ贈送せしもの也。

永らへば又や忍ばむ百草の花の昔を思ひ出でても

とある。寛文十年四月初めより病臥しがちで病状が安定して暇なときに詠んだ和歌から百首を撰出して、飛鳥井雅章に贈ったもので、雅章の添削結果として、百首中合点七十三首、うち褒美（褒められた詠歌）二十四首、その外に「可勝」「可聞」十三首であったという。外題「雅章卿辛亥合点庚戌寛文十年中百首病中歌吟」や内題「百首　病中吟詠之」によると、飛鳥井雅章の合点（添削）は寛文十一年（辛亥）のもので、綱政の詠歌は寛文十年（庚戌）中の病中に吟詠したものとある。

また、池田綱政自筆自撰家集で寛文十～十一年の詠歌を所収する『愚詠下書　甲』（書跡 284-21-1、四章参照）の184番目に、

百首歌を人の請ひしに遣はしければ、
返しに書き添へて来し侍りける

色も香も又類ひなき百草の花はいかなる種や蒔きけん

という和歌があり、寛文十一年の「八月十五夜」～「八月の末つ方」の間に採録されている。

したがって、浅野綱晟から書簡で何度も詠歌を請い求められた池田綱政は、それに応じて跋文を書き添え完成した病中吟詠百首を岡山から広島在中の浅野綱晟に届けたところ、跋文に書き添えていた「永らへば」の和歌（百首101）に対する返歌として「色も香も」の和歌（『愚詠下書　甲』184）が寛文十一年八月半ばに浅野綱晟から贈られてきたと見てよいであろう。

そして、岡山藩池田家旧蔵の綱政自筆病中吟詠百首（書跡 284-19-1）は、歌題・和歌・添削いずれも同筆であり、各添削の文頭に朱合点が付され、朱の補入記号で和歌を書き加えた箇所も三箇所あるので、池田綱政が手控本（草稿本）として残したものと考えられる。

浅野綱晟へ届けられたであろう百首歌そのものは確認できないが、おそらく添削原本ではなく手控本（草稿本）を清書したものであったと思われる。それと言うのも、林原美術館の岡山藩池田家旧蔵資料には、病中吟詠百首とは別の、一次資料に相

当する「池田綱政詠草一三四首」とそれに対応する「飛鳥井雅章自筆添削折紙」が存在するからである。

つまり、池田綱政病中吟詠百首は、人に披露するため新たに創出された二次的作品であったのである。

二、真の添削対象であった「池田綱政詠草一三四首」

池田綱政詠草一三四首（書跡545-10-3継紙一巻）の翻刻を末尾の〈表5〉に示した。以下の和歌に付した半角数字は、各資料における通し番号で、〈表5〉内の数字に対応する。

冒頭は「愚詠　綱政上」とあり、飛鳥井雅章への提出（添削依頼）の体裁になっている。朱書の合点・添削は、墨書の歌題・詠歌と同筆である。

したがって、飛鳥井雅章に提出した詠草一三四首（書跡545-10-3）は、「飛鳥井雅章自筆添削折紙」（書跡275-1）と同時に返却され、綱政自ら合点・添削を朱で加筆したと考えられる。

ただし、添削は正確に記されておらず、漢字と平仮名の表記の変更、記入位置の移動による指示語の変更、長文の省略（表1）、転記漏れ（表2）などがある。

詠草一三四首は、歌題や詠歌の行間（余白）に添削を朱筆で書き入れるため、〈表1〉の〰部分が省略されている。一方、病中吟詠百首は二次的作品のため行間を気にする必要がなく、〈表1〉①②は省略されず、③は和歌自体が撰出されていない。

ただ、③に関しては詠草一三四首119で「相伝事有」として省略されているので、霧と霞の詠み分けという「相伝」を秘すために詠草一三四首では省略し、人に披露するための病中吟詠百首では和歌を不採用にしたとも考えられる。

また、末尾には「合点七十三首、内褒美二十四首。可聞十五

〈表1〉詠草一三四首省略部分に対する添削折紙本文（〰部分）

①さはるへき――（添削38＝一三四首052「委細に有言長故略」と略す）
此御詠可勝候はん歟。たゝし源氏槿巻二「すさましきためしにいひをきけん人の心あさゝよとて、みすまきあけさせ給」と候。清少納言か「すさましきもの、しはすの月夜」と書候をうちて書候へは、紫式部か心には叶ましく候はん歟。但あまりいりほかなる申分に候歟。

②まきつめし――（添削59＝一三四首080）
おもしろく存候。乍去光広卿歳暮の歌に「残る暦のあとのすくなき」とよまれ候。めづらしきやうに風聞候同意にも可成候はん歟。

③たとらすや――（添削93＝一三四首119「相伝事有」と略す）
聞え候歟。乍去霞は八重霞にてもたとる程の事二而無之候。霧は少之間も隔はまとふ事に候。霞と霧との差別是にて候。

首」と記されており、病中吟詠百首の跋文では「可聞」の部分が「外可勝可聞十三首」となっているが、添削折紙ではその記述はない。したがって綱政自身による合計ということであろう。

それでは、詠草一三四首の評価として、綱政は何を「褒美」とし、何を「可聞」とみなしたのであろうか。

「褒美」については、合点の付けられた七十三首の内で評価された和歌二十四首であるので、「よろし」七首（047・048・064・103・104・105・106）、「可然」五首（054・056・058・059・061）、「めづらし」四首（045・046・067・068）、「おもしろし」三首（089・090・096）、「尤」三首（091・095・098）、「みたてあたらし」一首（049）、「源氏物語の心に可通」一首（092）と評された詠歌と思われる。

「可聞十五首」については、「聞え候」などと評された詠歌は八首（022・081・099・100・101・110・111・114）しかないので、「可勝」七首（041・044・052・070・075・085・126）も含む合計となっている。

三、詠草一三四首に対応する「飛鳥井雅章自筆添削折紙」

飛鳥井雅章自筆添削折紙（書跡275-1、33.1×48.5cm、帯紙「故御廟宝庫　飛鳥井雅章卿御筆　歌　九枚」）は、池田綱政詠草一三四首（書跡545-10-3）のうち九十九首について合点や添削を折紙四枚に別記したものである。〈表5〉に詠草一三四首に対する添削折紙の通し番号を示した。

その表記内容は、歌題と初句の下に省略記号（――）を記して、①合点、②和歌の訂正本文、③和歌の評定（よろし・珍し・面白し・可然・可勝など）、④和歌の心・詞に関する指摘（心に可通・詮無し・用捨・制詞など）、⑤和歌の前後を入れ替えて記す歌序の訂正、⑥綱政の述懐や病気に対する慰め・励まし・案じる言葉などが記されている。

例えば、和歌の訂正方法として添削折紙96（浦春月）では、

／須磨の浦の歟――

――月にわりなき歟

とあり、訂正本文には右下に小さく「歟」が添えられている。この部分に対する詠草一三四首124は、合点と結句の訂正本文が朱筆で書き入れられているが、初句「須磨の浦の歟」の訂正は見落とされ、病中吟詠百首でも訂正本文が反映されていない。

このような詠草一三四首への転記漏れは五箇所あり、残りを次の〈表2〉に示した。対して病中吟詠百首では、〈表2〉①②は訂正が反映されず、③④は和歌自体が撰出されていない。

〈表2〉詠草一三四首の転記漏れ部分に対する添削折紙本文（〜〜部分）

①／まれにたに問人もなき草の庵は歟	（添削17＝一三四首023）
②／ませの中に歟――	（添削23＝一三四首031）
③降そめて―― 雪中の中の字不慥候 中は 程をへたる心に候 一か二かなとの心に候歟	（添削51＝一三四首069）
④たのむへき―― なをからぬは直になき世と聞え候如何	（添削66＝一三四首088）

四、「すさみに書き連ね」た家集の存在

病中吟詠百首の跋文には、病中に「はかなき筆のすさみに書き連ねし」とあり、それに相当すると思われる池田綱政自筆自撰家集が二種類存在する。〈表5〉には、詠草一三四首に対応する家集ａｂの通し番号を示した。

家集a『愚詠下書 甲〈寛文十年庚戌、同十一年辛亥〉』（書跡284-21-1 袋綴一冊 全二三六首）、うち001〜084の間から四二首（合点あり二首）が取られる。

家集b『愚詠独吟〈寛文十年庚戌六月廿三日〉』（書跡295-4-2 綴葉装一冊 全三三一首）、うち121〜331の間から七三首（黒点・丸点・星印等あり六一首）が取られる。

いずれの家集も、見せ消ち訂正・重ね書き訂正・貼紙訂正、書き入れ、和歌の頭に付した付箋・丸点・黒点・朱点・合点など、和歌の推敲や撰出のあとが各所で見られ、ふだんの歌稿を書きためるために用意されていた家集ということが分かる。

まず、**家集a**『愚詠下書 甲』001〜084の詠まれた時期について、日付が記されている詞書を挙げると、001「年内立春 十一月十八日」、017「年内立春 極月廿一日」、058「廿七日節分に」、065「歳暮述懐 三十三ノ冬」（綱政の年齢）、068「寛文十一年辛亥正月元日、試筆詠三首和歌」、077「む月の中は…」、097「いにしとしのむ月のすゑの五日にみまかりしものゝ一回忌に」とある。

つまり、詠草一三四首には寛文十年十一月十八日〜十一年一月までの四十二首を撰出していることになる。病中吟詠百首の外題に「寛文十年中」と記されていたが、本当は寛文十一年一月までの詠歌も含まれていることが分かる。例えば、

寛文十一年辛亥正月元日、試筆詠三首和歌

a 068 あら玉のとしよりさきに春かすみ
たちなるゝ色もけさそのとけき（↓一三四首004）

a 069 春霞わきてたなひく色そなき
昨日のころもけふのことしも

a070 ふるとしに春はきぬれと月も日も
　　けふをはしめの空そのとけき（↓一三四首005）

とあり、この三首中二首が取られている詠草一三四首では詞書を「年内に春立けるむ月のついたちに」と一般化し、a070の初句「ふるとしに」を「年の内に」と変更している。

同じように、『愚詠下書 甲』054でも詞書「おなし夜、月のうつるをみて」とあって、実景を見て詠んでいることが分かるが、詠草一三四首065では「月前雪」と一般化している。

また、詠草一三四首に和歌表現を変更して取られている『愚詠下書 甲』の主な和歌を〈表3〉に示した。

〈表3〉『愚詠下書 甲』の変更本文（〰〰が異なる箇所、┈┈は見せ消ち）

初雪　（家集a028→一三四首062「けさ」）	①かれてたにもとあらの小はき又秋のおもかけみする夜はのはつゆき
雪中懐旧　（家集a046→一三四首074「雪も〰忍ふなみた」）	②雪の夜にふりにしことをかきつめてしのふたもともけさそこほれる
歳暮　（家集a039→一三四首079「いそくらん」）	③いにしはるの又たちかへるとはかりにことあらためてなにむかふらん
除夜　（家集a050→一三四首084「しけき」）	④こよひまていとなみいそく世中の明ほのよりやしつけかるらん
述懐　（家集a008→一三四首099「はてなん」）	⑤山かつの身にはあらねといつまてかしゐをひろひて朽やはつへき

次に、**家集b**『愚詠独吟』121〜331の詠まれた時期について、時期が記された詞書を挙げると、055「寛文十年七月十九日…」、115「…この秋は…」、147「神な月はしめ…」、271「やすきともなくわつらひてうちふしかちなる比、心におもふことつふやきける」とあり、寛文十年秋冬の詠歌ということが分かる。

例えば、『愚詠独吟』267では「題知らず」として詠まれた和歌の頭に「冬夕」が補入され、詠草一三四首050の歌題に一致する。このように詠草一三四首に一致する歌題の補入は、他にも三箇所（家集b127「残菊」・269「述懐」・331「述懐」）確認できる。

また、詠草一三四首に和歌表現を変更して取られている『愚詠独吟』の主な和歌を〈表4〉に示した。

以上、これら二冊の家集abの様子から、池田綱政は詠草一三四首を作成するにあたり、歌序・歌題・和歌表現など推敲していたあとや、付箋や丸点・黒点・星印などをつけて和歌選考に試行錯誤していた姿が見て取れるのである。

〈表4〉『愚詠独吟』の変更本文（〜〜が異なる箇所、……は見せ消ち）

閑居	（家集b240→一三四首027「草の戸」）
①秋もへぬむくら露けきかとの戸はさせてふむしのこゑにまかせて	
暮秋	（家集b131→一三四首031「はかなき」）
②ませのうちのうつろふきくのいろまてものこりすくなき秋そかなしき	
初冬	（家集b139→一三四首035「昨日は今日のむかし〜ころ」）
③いつしかにうつりそかはるきのふさへふりにし秋とかたるけふかな	（家集b140→一三四首036「風のいろは〜この葉や」）
④風のいろの秋もかはらてはけしきはもりのかれそや冬を告らん	
落葉	（家集b252→一三四首040「すゑにかせの〜森の」）
⑤もみちはをこすゑのはかりにふたつみつふきのこしたる風のさひしさ	（家集b253→一三四首041「吹風も」）
⑥風払ふ落葉の後は音たへて名のみ残れる木からしの森	
	（家集b275→一三四首054「いつしかに」）
⑦おしみ止し木の葉しくれにふりはてゝかけもさはらぬ霜の上の月	
懐旧	（家集b325→一三四首103「忍ふかな」）
⑧おりふしのことをあまたに忍はるゝまた遠からぬむかしなれとも	
懐旧非一	（家集b291→一三四首108「いつれ〜身のむかしさへあまた」）
⑨あらましをおもひいてゝは遠からぬこそおとゝしもさらに恋しき	

五、「池田綱政病中吟歌百首」における作意

ここで、池田綱政が詠草一三四首から百首歌を作成するにあたり、どのような作意があったのか、見ておこうと思う。

1、撰歌基準

飛鳥井雅章の添削折紙では九十九首について記述されているが、病中吟詠百首ではそのうち九首（添削10・18・24・25・51・53・66・71・93）が取られていない。

代わりに撰ばれている和歌は十首（百首002・007・034・036・039・047・051・065・073・016）であり、うち007・034が小字で補入されている。その中で、「可勝」の和歌に番われて負けた和歌として六首（036・039・047・065・073・016）が取られている。

2、添削表現の変更

飛鳥井雅章の添削折紙では「可勝」と評価している和歌は七首（添削29・31・38・52・56・63・97）であり、いずれの和歌も百首に取られている。そのうちの添削52の和歌「色まがふ」（一三四首070）は「雪中鷺」題三首ある中で「可勝候」と評価されているが、病中吟詠百首の「雪中鷺」題では「色まがふ」の和歌（百首062）のみが撰出され「可聞候」と変えられている。

3、訂正本文の採用

詠草一三四首では飛鳥井雅章による和歌の訂正本文を各句の横に朱で加筆しているが、病中吟詠百首では訂正本文を採用して原作が分からないようになっている。しかし、添削折紙から詠草一三四首への転記漏れの部分（表2①②など）は反映されていない。例えば、百首020は全文訂正の和歌であるが、「この夕へ…」の和歌の頭に「／引直シ」とあり、題の下には「○郭本公…」の和歌が小字で補入され原作を示す「本」が付されている。この原作には合点がなく全文訂正の和歌であるので撰歌に迷ったと思われるが、結局は雅章による全文訂正の和歌の方を引用し直したことを表しているものと考えられる。

こういった点も、百首における撰歌の推敲あとと考えられ、池田家旧蔵本が草稿本であることを示している。

4、歌序の変更

添削折紙の61「歳暮懐旧」・62「歳暮恋」の順に対する詠草一三四首では082「後 歳暮恋」・083「始 歳暮懐旧」とあり、題の上に朱で「後」「始」を加筆している。それに対して百首では071「歳暮懐旧」・072「歳暮恋」となっており、雅章の指摘通りの順に変更している。

また、詠草一三四首118以降の最後十七首（春題）の部分について、118～127は「詠五首和歌」として五題で各二首ずつ挙げられており、127と128の間には二行分の空白がある。〈表5〉に示したように、最後十七首は寛文十～十一年の歌稿を集める家集aに取られておらず、春題の追加を意図した部分であることが分かる。対する病中吟詠百首では、〈表5〉に示したように、百首006～018として春題にまとめられている。

5、和歌表現の推敲あと

病中吟詠百首だけの加筆部分が三箇所存在する。033「音なくて」・094「思ふいにしへ」は誤字の訂正かもしれないが、

005／いつしかに雪け催す曙の雲もかすみにうつる山のは

とある「にほふ」の本文は百首歌を制作する際の推敲のあとと考えられる。

また、詠草一三四首068の結句「雪そたゝよふ」の書き入れは墨書で、添削折紙には指摘がないので、詠草一三四首だけの記述である。対する百首061では「雪そたゆたふ」の本文を採用している。百首撰出の際の書き入れの可能性がある。

六、池田綱政詠草一三四首の摂取和歌

綱政はどのような和歌を参考にし詠作しているのか、摂取し

た和歌の主なものを挙げる（以下、綱政の詠草以外は新編国歌大観（DVDROM）に依り、漢字を当てた部分がある）。

①夜もすがら独ふるやの雨そそき余りなるまで忍ぶ古（109）

催馬楽「東屋」、「五月雨はまやの軒端の雨そそき余りなるまでぬるる袖かな」（新古今集・1492・藤原俊成）

②色紛ふ雪のふる江の朝風に身の毛乱れて立てる白鷺（070）

「すごきかな賀茂の河原の朝風に身の毛乱れて鷺立てるめり」（慈円・拾玉集 888）

③偽のこれもなき世の春霞たがまことより立初むらん（003）

「偽のなき世なりけり神な月たがまことより時雨れそめけん」（藤原定家・拾遺愚草 2408）

④高根よりいつ織かけて山姫の月にさらせる布引の滝（020）

「山姫の手にたゆからず織りかけてさらすやいく世布引の滝」（飛鳥井雅親・亜槐集 1017）

⑤詠やるすゑ白雲に続けども霞隔つる武蔵野の原（118）

「今宵もやをかやがもとに仮寝せむすゑ白雲の武蔵野の原」（常縁集 381）

⑥暮毎にあだなる年は身につみて昔の遠く成ぞはかなき（083）

「雪降りて暮行く年の数毎に昔の遠くなるぞ悲しき」（風葉集 443 わが身にたどるの后宮宰相）

⑦心にもあらで浮世に住む程は死なぬ薬も何にかはせん（101）

「あふことの涙にうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ」（風葉集 570、竹取物語 15）

以上のように、池田綱政は藤原俊成・定家・慈円・飛鳥井雅親など歌人の詠歌だけではなく、物語の和歌も取り入れている。林原美術館の岡山藩池田家旧蔵資料には綱政筆の家集（拾遺愚草・拾玉集など）の抜書だけではなく、風葉集の抜書も多くあり、実際の詠作の糧にしていることが分かるのである。

おわりに

池田綱政はふだんから歌書や物語などの書写活動や詠作活動に努めていた。寛文九年頃から同門の浅野綱晟との交流が始まり、書簡で飛鳥井雅章添削の詠歌を見せて欲しいと請われる。

そこで池田綱政は、家集ａｂの寛文十年秋～同十一年一月の詠歌から一一五首を撰出して、春題一七首を追加し、最終的に詠草一三四首に仕立てて、飛鳥井雅章に添削してもらう。

そして、雅章から届けられた添削を詠草一三四首に朱で加筆し、その詠草一三四首から百首を撰出して跋文を加え、病中吟詠百首を作成した。完成した百首は寛文十一年八月前半までには浅野綱晟に披露していたと考えられるのである。

〈表5〉詠草・添削対応表

・通用の字にした箇所や、添削の位置を移動した箇所もある。
・算用数字は各資料内の通し番号。
・×は当該歌なし、＊は出典不明を表す。
・家集aは『愚詠下書 甲』（書跡 284-21-1）
・家集bは『愚詠独吟』（書跡 295-4-2）
・添削は「飛鳥井雅章自筆添削折紙」（書跡 275-1）
・百首は「池田綱政病中吟詠百首」（書跡 284-19-1）

池田綱政詠草一三四首（書跡 545-10-3）

・ゴチ…歌題（二字下げ）・和歌（一首二行書）
・／は合点。・行書体…朱書きの添削

愚詠 綱政上	家集 ab	添削	百首
年内立春			
001／白雪のふるとしわかす今朝よりは	a001	01＼	001＼
心に春のたつかすみかな			
002 けさよりは年の内外のへたてなく	a066	×	002
山のはうすくたつ霞哉			
立春			
003／偽のこれもなき世の春かすみ	a067	02＼	003＼
たかまことより立初むらん			
年内に春立けるむ月のついたちに			
004 新玉のとしより先に春かすみ	a068	×	004＼
たちなるゝ色もけさそのとけき			
005／年の内に春はきぬれと月も日も	a070	03＼	004＼
けふをはしめの空そのとけき			
初春			
006／いつしかに雪け催す明ほのゝ	a002	04＼	005＼
雲もかすみにうつる山のは			
鶯			
007／窓近き庭の梅かえさかぬまも	a081＼	05＼	008＼
まつこゑにほふ春のうくひす			
008 谷の戸の名残やいかに竹にふし	a082	×	007
花にむつるゝ春の鶯			
早春鶯			
009 咲あへぬ花をいさめて鶯の	a074	×	×
をのか時しるけさの初こゑ			
朝鶯			
010／閨の戸をゝし明かたの軒はより	a083＼	06＼	009＼
あさゐいさむる鶯のこゑ			
011 朝ほらけすかたやいつこねやちかく	a084	×	×
かすみにもるゝうくひすのこゑ			
雪中鶯			
012 やとりする竹を夜のまに降つみて	b302	×	×
ゆきにこゑある窓のうくひす			
雪中若菜			
013／降雪もひとつたもとにつみそへぬ	a071	07＼	011＼
沢辺のねせり野へのわかなに			
梅			
014／鶯のこゑのにほひはやとりする	b320	08＼	012＼
むめか香よりやうつり初けむ			

015 花有遅速
／あかす猶春はこゝろを尽せとや（て）
をくれさきたつ花の情に（にや有らん）

古宅郭公　聞え候乍去一二句のつゝき
ふと書たるやうに候

016
時鳥かたふく軒の立はなに
かをなつかしみをちかへりなく

017 人伝聞時鳥
ほとゝきすあなあやにくにに山かつの（ほとゝきす）（きゝてもあやな）（この夕へ）
かたりつたへのけさのはつ音は（人つてならぬ）（こゑもかな）

018 山家霧
／煙かとみれはふもとのゆふきりに
軒はくれ行松の下いほ

019 田家月
／露なからまはらにむすふ小山田の
庵は月ももりあかしけり

020 月照瀧
／高ねよりいつ織かけて山姫の
月にさらせる布引の滝

021 月前霧
／たちこめて庭のこすゑはわかねとも（中空は）（さしいつる）
月にさはらぬ夜はの秋きり

022 庭月　聞え候か
色香ある花のまかきも八重葎
しけれる庭も月はへたてす

b315	*	b296	b239	b121	b231	a006	a011
16	15／	14／	13／	12／	11	10	09／
025	024／	023／	022／	021／	020	×	019／

023 閑居月
／まれにたに分もならはぬ庭なれは
つゆのまに／／やとる月影

遠村秋月　夕霧深隔タル里にて候は、月にも
あらはれかたく候はんか

024
山もとは夕霧ふかくへたてゝも
月にあらはるゝ里の一むら

025 船中月　中字ノ心すくなく候か
月夜には空も波路もひとつにて
こゝろにはかる船の行すゑ

026 虫
やゝふけぬかことかましき虫の音も
猶このころは遠さかりゆく

027 閑居虫
／秋もへぬむくらつゆけき草の戸は
させてふむしのこゑにまかせて

028 秋夕
何となく心ほそさもむしの音も
あはれはあきの夕暮の空

029 隣家擣衣
／中垣をへたつるとても隔てぬは
おなし夜寒に衣うつ音

030 白菊
／咲にほふまかきの菊の有か中に
色なきいろの花そめかれぬ

b129	b171	b134	b240	b125	b317	a005	b316
22／	21／	×	20／	×	19	18	17／
030／	029／	×	028／	×	027	×	026／

031 暮秋菊
／ませの中のうつろふきくの色までも
残すくなき秋そはかなき（としすおもふ）

032
森の木の柴のうすく色
つきしをみて　さへト云詞無詮候か
時雨さへめくるたえまのほとみえて
また一しほのもりの紅葉ゝ

033 夕山紅葉　下ノ句龍田の謠ニ候歌下句花と木々とのかはり迄にて同意候惣別謠なとの心詞は用捨いたす事候
山のみなうつりてけふの色ときは
夕日や木々の時雨なるらん

034 初冬
言の葉の露をかたみに秋くれて
しくれ催す冬はきにけり

035
いつしかに昨日は今日のむかしにて
ふりにし秋とかたるころ哉

036
／風のいろは秋にかはらてはけしきは（けさよりことに）
森のこの葉や冬をつく覧

037 夜時雨
／木の葉かときけはあらしの音もなし（なくて）
一むらしくれ夜はの枕に（ゆめさまふなり）

038 落葉
あやにくの世はこれのみか木の葉さへ
おしめははらふ山おろしの風

b155	b223	b140	b139	b138	b144	b135	b131
×	27＼	26＼	×	×	25	24	23＼
034	033＼	032＼	×	×	×	×	031＼

039
／夜のほとのあらしのあとは時雨ても
けふはそめます木の葉やはある

040 杜落葉
紅葉ゝをこすゑにかせの二つ三つ

041
吹残したる森のさひしさ
吹風も落はの後は音たえて　此歌可勝候
名のみのこれる木枯のもり

042 夕落葉
／かきりあれは風のさそはぬ夕暮も
しつこゝろなくちるもみちかな

043 残菊
人のよもかくこそ有けれいろもかも
つくしはてたる菊の哀さ

044
霜をたにいとひし比はゆめなれや
見しにもあらぬ白きくの花　此御詠可勝候

045 枯野　両首ともにめつらしく存候
／虫の音も秋のにしきも色かへて
かれ野に残る風そさひしき

046
／見る人の哀をまねく花すゝき
つゝりの袖に霜をふかめて

047 氷　是又両首ともによろしく存候
／山風にもろき木の葉を吹入て
よとむかけひや先氷るらん

048
／春の田のなわしろ水のそれならて
冬もなかれをせく氷かな

b246	b243	b306	b174	b127	b157	b227	b253	b252	b142
35＼	34＼	33＼	32＼	31	×	30＼	29	×	28＼
044＼	043＼	042＼	041＼	040	039	038＼	037	036	035＼

049	田氷　みたゝあたらしく存候													
	／かりすてし深田の面のたまり水													
	むら／／こほる冬の明ほの													
050	冬夕													
	／哀さはいつはあれとも冬かれの（秋よりもあはれまさる）													
	いろなき庭のゆふくれの空													
051	冬月													
	ねやの戸のいつくもりてか手枕に													
	うつるもさゆる冬の夜の月													
	「此歌可勝源氏槿ノ巻ノ事委細に有言長故略													
052	さはるへき木の葉は散し跡なから													
	夜さむのかせや月のくまなる													
053	色まかふ庭のかれふの月影は													
	しもをかぬよも霜むすふよも													
054	霜上月　此三首可然存候													
	／いつしかに木のはしくれと降はてゝ													
	影もさはらぬ霜の上の月													
055	さひしさの色とそみゆる冬かれの													
	かけもあさちの霜の上の月													
056	／秋にみしおもかけなから冬の野は													
	影すさましき霜の上の月													
057	影うつる池のかゝみのうす氷													
	さらてもしろき霜の上の月													
058	／風さむみ入江に残るみたれあしの													
	かれはをわたる霜の上の月													
	b312	b267	b283	b158	b173	b275	b276	b277	b278	b281				
	36＼	37＼	×	38	×	39＼	×	40＼	×	41＼				
	045＼	046＼	047	048	×	049＼	051	050＼	×	052＼				

059	雪　両首可然存候													
	／ゆきおれはあやしけれとも木のもとに													
	あとつけわひてえこそはらはね													
060	こすゑより風にちりくる庭の面は													
	はなゝきあとの花のしらゆき													
061	／あかすみる雪ふみ分てとふ人は													
	なさけにこたるつらさ成けり（とおもへと）（ならすや）													
	なりけりの詞今は不読事候													
062	初雪　白萩の心に候													
	かれてたにもとあらのこはき又秋の													
	おもかけみするけさの初ゆき													
063	夜初雪　初雪ノ心うすく候た、夜雪と計可然候													
	しつか成よひのこさめのをやみより													
	暁ちかくふれるしらゆき													
064	水路新雪　よろしく存候													
	／けさはまた船もかよはぬ川淀の													
	氷のうへにつもるはつ雪													
065	月前雪													
	／雪に移るしはすの月もうとまれす													
	またはるあきのおよふ色かは（はるあきの花の）													
066	社頭雪													
	／神もさそ清き心のきよからん（けさのあさけかみもこゝろ）													
	ゆきのしらゆふかゝるあしたは（くるみつかき）													
	a024	a025	a026	a028	a021	a004	a054	a036						
	42＼	×	43＼	44	45	46＼	47＼	48＼						
	053＼	×	054＼	055	056	057＼	058＼	059＼						

067 雪後雨　めつらしく存候
いたくなふりそ夕暮の雨

068 海辺雪　御作意めつらしく存候
／浦近くつなける船に降つみて
氷らぬ浪に雪そたゝよふカ（たゆたふカ）

069 雪中鷺　雪の中の中の字不慥候　中は程へたる心に候
降そめてまたほともなき夕暮に
ゆきつむゝらの杜の白鷺

070
色まかふ雪のふる江の朝風に　此歌可勝候

071
みのけみたれてたてるしらさき
河よとの氷のうへにたつさきの
ひとつに見ゆる雪の明ほの　結句制詞

072 雪中灯
／ともし火も窓のゆきにや移ろひて（まどのゆきにねやのともし火か、やき）
かすかなる比の幽にもなき

073 雪埋竹
／呉竹のまとうつ音のしつけきは
あらしやよはの雪をもるらん

074 雪中懐旧
雪もよにふりにしことをかきつめて
忍ふなみたも今朝そ氷れる

075
ゆきとくる軒のしつくの音よりは
ふるきを忍ふ数そまされる　此御詠可勝

a037	a048	a049	a039	a060	b307	b308	b272	b309
49／	57／	×	58／	59	51	52	50／	53
060／	061／	×	068／	069	×	062	061／	×

b241	a022	a046	a045	a038	a048	a061	a059	a050
55／	54／	×	56	×	61／	62／	60	×
064／	063／	065	066	073	071／	072／	070	073

076 歳暮
行を送りくるをむかふるとしなみの
はやせもわかすなにいそくらん

077
／いかはかりけふの日をたに惜む身の（ことはりや）
ましてなれにし年のなこりは

078
思出の有にもあらす春秋を
あたにみそちの歳の暮かな

079
／いにし春の又たちかへるとはかりに
ことあらためて何いそくらん

080
まきつめし暦のすゑに残る日の
かすさへおしき年のくれかな
面白候光広卿歌同意にも可成候はんや

081 歳暮雪　聞え候はん
ふり侘る身にはとまりて行年の
あとはゆきにも見えぬけふ哉

082 後歳暮恋
／今日までも猶さりともとたのめ中（こしか）
人はつれなく年そくれぬる

083 始歳暮懐旧
／暮ことにあたなるとしはみにつみて
むかしのとをく成そはかなき

084 除夜
今夜まていとなみしけき世中の
明ほのよりやしつけかるらん

085 門にたつる竹の一よのふしのまや
冬と春とのへたて成らん　此御詠可勝

述懐

086 ／しつやかに世をのかれてもいかならん
うきは身にそふ報なりせは
よそよりはうかるへき御身とは不被存候
いか、無心え事候

087 ／うき事のもしかはるやとはかなくも
このころまては世をたのめつる
たのむへきかたこそなけれなをからぬ
世にもむさふる人のこゝろは

088

089 ／よもきふの心のまゝの世中を
たれあさましとみる人もなし　おもしろく存候

090 ／つらきとてさのみ歎かし世中の
なくさむこともうきよりそしる　同前に候

091 ／明日も又同しことにてくれはてん
昨日もけふも何かはれる　尤に候

092 ／物思へはかきなすことのをのつから
その色ふしも音にかよひけり
源氏物語の心にも可通候

093 有てうき身はあた波のうつせかい
からき世にしもいつまてかへん
聞え候但からき世用捨可有事候

094 我からともに住虫のみをそ思ふ
やすくふる世もからくふる世も

b216	b221	b220	b268	b269	a031	a016	a014	a007	a051
×	71	70＼	69＼	68＼	67＼	66	65＼	64＼	63
×	×	080＼	079＼	078＼	075＼	×	077＼	076＼	074

095 ／何をきゝ何を見るにも世中は
心のほかのなくさめそなき　尤に候

096 ／覚やらぬ心のやみの迷ひより
物におとろく夢の世中　おもしろく存候

097 かきあつめみるもかひなしおろか成
心ならひのあたし言葉は

098 ／あなはかなけふもくれぬといひ／／て
むなしくとしのみにそつもれる　尤に候

099 ／山かつの身にはあらねといつまてか
しゐをひろひて朽やはてなん
聞え候やかて御罷過可有之候御短通に候

心ち例ならすなやみかちにて
こもりゐ侍る比よみける
両首ともに聞え候御短通に候へは御養生の
かいにも可成候心閑に御保養専一に存候

100 いつのよの何の報にかくはかり
有にかひなき身とは成けん

101 心にもあらてうき世にすむほとは
しなぬくすりも何にかはせん

寝覚述懐　人間のならひ何方も如此候

102 ／いかなれははかなき夢の絶間にも
あらぬねかひの胸にみつらん

103 ／おりふしのことをあまたに忍ふかな
また遠からぬむかしなれとも

懐旧　何も同等によろしく存候

b325	b292	b331	b137	a008	b164	b194	b193	b217
79＼	78＼	77	76	75＼	74＼	×	73＼	72＼
088＼	087＼	086	085	084＼	083＼	×	082＼	081＼

104／うき事もそのきはほとは忘られて
やすかりけりと忍ふいにしへ
105／おり／／を思いつれはこゝろまて
見るかことくにうかふいにしへ
106／さま／／にうつりかはれる世中を
おもひつらねてむかし恋しき

独懐旧
107／忍ふにもなくさめてまし思いてゝ
人にかたらふむかしなりせは

懐旧非一
108／あらまし（過にしを）を思いつれは遠からぬ
身のむかしさへあまた恋しき

雨中懐旧
109／夜もすから独ふるやの雨そゝき
あまりなるまて忍ふいにしへ

山家　右両首同等に聞え候
110／とちはつる柴のあみ戸はさゝかにの
くものいとすしくる（ち）人もなし

山家水
111／したゝりのすゑせき入（かけ）で山かけに
心もすめる庭の池水（やり）

披書知昔
112／とちをけるむかしかたりの筆（さまさまの）の跡は
みぬよのことも見る心ちして

b327	b328	b329	b290	b291	a032	b160	b289	b295
80／	81／	82／	83／	84／	85／	86／	87／	88／
089／	090	091／	092／	093／	094／	095／	096／	097／

恋
113／いかてわれつらきとてしもつらからん（すゑつゐになひくをもみんわかくさの）
心みしかき思ひならねは
114 聞初しみそめしおりやたねならん
いま分まよふ葉山しけ山　聞え候

後朝
115 わすれめやけさの又よの一ことも
116 あからさまにはいはしと思へは
えもさゝしその面かけもへたつやと
をくりて出し聞のつま戸は

片思
117／つれなきにさらはさてとも思はれぬ
いかに結ひし中の契そ

詠五首和歌

野霞
118／詠やる（さらぬたに）すゑしら雲につゝけ（たちつゝく）とも
かすみへたつる武蔵のゝ原
119 たとらすやかよひなれても春日のゝ
野守よいかにふかき霞に
霞は八重霞にてもたとるほとの事は無之候相伝事有

山家鶯
120 ことしけき世に遠けれはうくひすの
こゑにはちかき谷のした庵

b210	b211	b213	b214	b162	*	*	*	*
89／	90	×	×	91／	92／	93	×	×
098／	099	×	×	100／	006／	×	×	×

121 ／人遠き（とばぬ）柴の戸ほそになくさむは
軒はになるゝうくひすのこゑ

梅薫風

122 たかやとそよそいはなとか過かての
こゝろをさそふ梅のした風

123 ／さそひくるたよりに春はしのはるゝ
梅さく軒をすくるゆふかせ

浦春月

124 ／すまの浦やあまのたくもの夕煙
さらてもかすむ春の月影（月にわりなき）

125 波の音も霞にこめて朧よの
いそきはうすく移る月かけ

庭春雨

126 いつしかに庭のかれふのうすもえき
めくみかしこき春雨の中　此御詠可勝

127 庭たつみむら／／よとむ雨の中に
もゆるくさ葉そ春の色なる

若菜

128 袖の色はみとりならねとつみ入て
わかなにそむる春の日くらし

水辺梅

129 はる風や花のかゝみのくまならん
さゝら波よる梅のした水

*	*	*	*	*	*	*	*	*
×	×	×	97	×	96／	95／	×	94／
×	×	016	015	×	014／	013／	×	010／

待花

130 をそくとく散を思へは山さくら
まつまそ花のさかりなりける

131 ／とあらましかくあらましと（やかくと）　さかぬまも（のみに）
花にこゝろを尽してそまつ

宿花

132 八重よりもたゝ山さくら植をかむ
ひとへに花をめつるやとには

霞中花

133 ／たちかくす（なひく）霞も花ににほふなり
山さくらとの明かたの空

帰雁

134 この比は天飛かりの雲ふかく
わけゆくこゑや名残なるらん

合点七十三首 内褒美二十四首 可聞十五首

*	*	*	*	*
×	99／	×	98／	×
×	018／	×	017／	×

［付記］

貴重な資料の閲覧をお許しいただいた林原美術館のご厚情に心より御礼申し上げます。

（ふくどめ　たまみ／本学非常勤研究員）